

アオのくれたふしぎなじかん

名瀬市立朝日小学校 2ねん はま田 りん

ナミちゃんは、小学二年生。ナミちゃんのいえのまえには大すきな海が広がっています。海べのみちを、おばあちゃんといっしょにおさんぽするのがナミちゃんの楽しみでした。

ある日、とてもかなしいことがおこりました。大すきなおばあちゃんが、天国へ行ってしまったのです。ナミちゃんにかわいいワンピースを作ってくれたり、絵本を読んでくれたり、うたを教えてくれたりしたやさしいおばあちゃん。おばあちゃんのえがおを思い出すと、会いたくて、会いたくて……。

そんなときナミちゃんが行くのは、海のちかくのおばあちゃんのおはかです。おはかのとなりの石の上にすわって海を見ていると、おばあちゃんのうたをきいているような気もちになるのです。

その日、いつものようにおばあちゃんのおはかに行くと、ナミちゃんをまっていたかのように、見たこともない、青いはねのチョウがとまっていました。

そのはねの青色は、ふしぎなことに、お日さまの光をあびてかがやく海の色と同じでした。

「何てすてきなチョウ。どこからきたんだろう。」

すると、

「海からだよ。」

と声がきこえました。

ナミちゃんは、あたりを見回しました。でもそこにいるのは、青いチョウだけでした。まさかチョウがしゃべるなんて。

「青いチョウは、海にすんでいるものさ。」

「ええっ。あなた話せるの。」

ナミちゃんはびっくり。

「そんなのあたりまえさ。海のチョウは海ずきの人げんとは、話していいことになっているのさ。」

「すごい。あたしはナミ。あなたは。」

「ぼくはアオ。ねえナミちゃん、きみどうして、いつもここにくるの。」

「それはね、わたしの大すきなおばあちゃんのおはかがあるからよ。ここへきて目をとじると、おばあちゃんのうたがきこえてくるような気がするの。」

「おばあちゃんに会いたいかい。」

「会いたいわ。ねえ、会うことができるの。」

「ぼくといっしょに行けばね。」

そう言うと、アオはナミちゃんの手ひらにとまりました。

青いはねを大きくゆらすと、金色のこながナミちゃんをつつみしました。

まばたきをしたしゅんかん、ナミちゃんは、じ分の体が小さくなっていること

に気がつきました。

「さあ、のって。」

ナミちゃんをのせたアオは、海へとびはじめました。

「どこへ行くの。」

「おばあちゃんに会うまえに、会っておかなければならない人がいるんだ。」

「それは、だれ。」

「海の女王、ブルークイーンさ。」

アオは、海の中にとびこみました。ナミちゃんは、思わず目をつぶりました。

「あれ、わたしいきができるわ。」

「そうさ、とくべつなこなをかけたからね。」

アオがわらいました。

海の中は、見たこともないようなふしぎなけしきでした。

きらきらと明るく光るしんじゅのみずうみ。色とりどりのさんごの森。いそぎんちゃくのお花畑もぬけていきます。

とおくのほうに、ずっとまえに図かんで見た天女のかむりがいが見えました。

「わたし、あの貝知ってるわ。図かんで見たことあるもの。本ものが見られるなんてしんじられないわ。」

ナミちゃんがそう言うと、アオがくすっとわらいました。

「ナミちゃん、あれが海の女王、ブルークイーンのおしろさ。」

そう言うと、アオは大きな白いまき貝でできた、もんのまえにとまりました。

ナミちゃんがおりと、しろの中から、ふしぎな魚が出てきました。

「あれはブルークイーンをつかいさ。ナミちゃんのせかいでは、りゅうぐうのつかいってよばれているらしいけどね。」

りゅうぐうのつかいは、ナミちゃんたちのまえにくると、

「どうぞこちらへ。」

と言いました。その声は、海のそこからひびいてくるようなひくいひくい声でした。

つかいのあとについて、ナミちゃんとアオは、おしろの中に入りました。

おしろの中は広くて明るく、たくさんの魚がうごき回っています。しんじゅのシャンデリアがかがやき、うつくしいさんごや貝がらでかざられています。

おしろの一ばんおくは、ブルークイーンのへやでした。へやのまん中に青いすがあり、海の女王ブルークイーンがすわっていました。

海のような青い目をしていて、白い貝のようなドレスをきているとてもうつくしい人でした。

「ナミちゃん、ようこそ。よくここまできましたね。」

「どうして女王さまがわたしの名まえを知っているんですか。」

するとブルークイーンは、にっこりわらって、

「それは、あなたのおばあちゃんから、あなたのことをきいているからよ。」

と言いました。

「おばあちゃんは今、ネリヤの里という、海の中のわたしの国にすんでいます。」

「えっ、おばあちゃんは、このまえ天国に行ったはずです。」

「ネリヤの里は、なくなった人が行くところなの。それも海のようにうつくしい心をもった人だけが行けるところよ。」

ブルークイーンは、やさしく話してくれました。

「ブルークイーン。ナミちゃんをおばあちゃんに会わせてあげてください。ふたりとも海の大すきな心のきれいな人げんです。」

アオがそう言うてくれました。

「わかっていますよ。わたしもそうしてあげたいと思っていたところです。さあアオ、ぎんのこなをナミちゃんにふりかけるのです。」

ブルークイーンがそう言ったとたん、アオのはねから出たぎん色のこながナミちゃんをつつみました。

まばたきしたしゅんかん、ナミちゃんはべつの場合しょにいることに気がつきました。たった一人で。

色とりどりの花がさき、その中には小さな花のせいたちが、おどっていました。

海と空はつづいていて、水へい線も見えません。海にはたいようやくもがうかび、その中をとりや魚が楽しそうにおよいでいます。

「何てふしぎなところ。」

ナミちゃんがあたりを見ていると、

「ナミちゃん、よくきたね。」

うしろのほうから、なつかしい声がきこえました。

ふりむくと、会いたくて会いたくてたまらなかつたおばあちゃんが立っていました。

「おばあちゃん、会いたかった。」

ナミちゃん目から、なみだがこぼれました。

「やっぱりなきむしさんね。」

そう言うて、おばあちゃんは、にっこりわらいました。

「さあおいで、わたしのおうちでゆっくり話をきかせておくれ。」

おばあちゃんは、さくら色のかわいいおうちにつれて行ってくれました。

中は、外から見るよりずっと広いおおきなうちでした。

おばあちゃんがよく作ってくれた、なつかしいケーキを食べながら、ナミちゃんはいろんな話をしました。学校のこと、うちのこと、アオのことやブルークイーンのことも。

ナミちゃんが話しているあいだ、おばあちゃんは、やさしいえがおできいてくれました。

「ねえ、おばあちゃん。もう会えないの。」

しんばいになって、ナミちゃんがきくと、

「そんなことはないよ。ほらその水そうを見てごらん。」

そう言うて、おばあちゃんは、水そうのよこのボタンをおしました。すると、水そうの中に、ナミちゃんのうちがうつっていて、おかあさんがせんたくものを取りこんでいます。

「あなたがあぶない目にあいそうなときは、この水そうからあなたのせかいへ行けるのよ。ただ、体はどうめいになってしまうけどね。」

ナミちゃんは、はっとしました。

「おばあちゃん、わたし、さいきん車にひかれそうになったんだけど、だれかにひっぱられたような気がしてたすかったの。もしかして、おばあちゃんがたすけてくれたの。」

にっこりわらって、おばあちゃんはうなずきました。

「気をつけなきゃだめよ。」

「おばあちゃん、ありがとう。いつもまもってくれてたのね。」

「ちりん。」

風がふいて風りんがなりました。

「風りんがなったってことは、もう夕ぐれどきね。そろそろおかえり。ナミちゃんが会いたいと思えば、わたしはいつでもそばに行くからね。」

そう言うと、おばあちゃんは貝がらのでんわで、アオをよんでくれました。

ネリヤの里の海の中から、アオがとんできました。

「よかったね、やさしいおばあちゃんに会えて。」

「ありがとう、あなたのおかげよ。」

おばあちゃんの手をぎゅっとにぎって、ナミちゃんはアオを見ました。アオのはねから青いこながとんできて、ナミちゃんをつつみました。

ナミちゃんは、おばあちゃんのおはかのまえに立っていました。おばあちゃんがいつも近くにいることを知って、ナミちゃんはとてもうれしくなりました。

「おばあちゃん、わたしはいつまでもおばあちゃんが大すきよ。ずっと見まもっていてね。」

海にしずむ夕日をあびて、ナミちゃんは走り出しました。

